

昭和43年卒業同期の吉川佳一君が、電子ブック出版「[書肆華山房](#)」という名称でかねてより活動していることは、当同期会サイトでもご紹介の通り。現在アマゾンからkindle版で次々に出版され続けている。基本は既に刊行されている内外の作品を著作権クリアーの上で再構成、表紙装幀も整えて読みやすく、安価刊行。最近では、同期生の嶋田正文君の作品群から（その一部ながら）既に三巻が過日刊行されている。（[嶋田正文作品集](#)）

単に間口を広げるのみならず、吉川君の嘗て構想提唱した「同期会叢書」路線を想起、その夢プランの一助と思い、当方も脇から応援していたところ、今回もう一冊（上下二巻）が加わった。

互いに七十路を歩み始めると、両親、親戚、知人（時に教え子）を見送ることも稀ではなく、彼らを見送るよすがとして、時に追悼・遺稿集を紡いで来たりもした。中でも、高校教師の道に進む契機となった講師時代の元仙台高校大谷校長没後、奥様より送られてきた段ボール函入りの原稿を五年前に一冊の本にしてご遺族元同僚卒業生らに頒布した。『鎮(しず)もれる塔—大谷房之助遺文—』(2017)

菊地久治先生の本に携わる前のことでもあり、そのノウハウについて当時吉川君の指南を受けたことがきっかけで、彼から今回電子版へのお誘いがあった。書籍版の刊行については、刊行委員会のお蔭によるわけなので元委員長の了解を得て、電子版刊行権と販売利益とを新たな再編集校閲刊行作業と相殺の形で吉川君にお願いした。当方の前書き後書き、註や年譜索引など全面カット、世間的履歴や個人的思慕など一切脱ぎ捨てた一思想人としての大谷が現代に蘇った。おまけに書籍版の多数の誤植など丁寧に直してくれている。何よりも、故人の世間的知人の手許と国立国会図書館にだけ納め得たことで我が責務終えりと思っていた了見の狭さを感じた。

何よりも、大谷論考の一動機と見られる「三島事件」の衝撃を、江戸思想の系譜に於ける陽明学の軸の解明と、男女（アンドロギュノスの切断に戻れば男男も）の間に横たう文芸的カオスの表現とによって受け止めようとした著者の模索。それは“死者の宣言”に対する“生者の側からの応答”であった。そのことに改めて気付かされたのは今回、華山房が新編集の電子版刊行を、憂国忌（11月25日）に合わせて超特急で為し得たことであった。改めて華山房吉川佳一君に礼を述べたいと思う。発せられた言葉の波動は、あらゆる浜辺に漂着する可能性がある。

[「大谷房之助著作集」上巻、下巻](#)（蛇足的次第は：<https://algos.exblog.jp/241674305/>）

古来無数の生死の砂嵐をかい潜った言葉の雫は、一人の脳内生理に発出して息となり、言葉となり、他者の胸に届く（こともある）。その通路・回路・舟の航路は、様々な形で保障されるべきである。

七十路を昇る(乃至降る) 我ら同期の、これまで散々思い散らし言い散らかし書き散らし、世にも飽き、世からも飽き(呆れ)られ知られぬままの言説は、ぜひ書肆華山房の手に委ねてみらるべし。未来に新たな命を得て、いずれ漂流ボトルの如く他者の浜辺に流れ着くこともありうるか。放っておいても消えゆく脳内データ、取っておいても没後一斉ゴミ捨て、古書紙屑（案外古本も生き延びる）。電脳世界も不滅ではないものの、他日漂着した先で浮寝の旅人の手にでも落ち、流離の憂いを新たにすれば本望…。誰にでも大谷夫人の如き、当方の如き、よき理解者がいるわけではないのだから。

机上机下、書棚押入れ片付けつつ、人生航路の宝島探検のオトシマエをこらで付けられては如何かと、老爺心ながら自らも反省しつつ愚考進言。（2022/12/12）